



佐々先生の 海外・帰国 あれこれコーナー

このコーナーでは、いろいろな立場の人たちの声を聞きながら、特に海外に住んでいる保護者の方々に役立てていただける情報や、参考になる考え方などを提供していきます。

取り上げてほしいテーマ、ご意見、ご感想などをお知らせください。皆様の声を聞きながら、このコーナーをできるだけ実際に役に立つものにしていきたいと思っています。連絡は、Eメールで、sasa@keimei.ac.jp までお願いいたします。

啓明学園初等学校 校長 佐々 信行（さっさ のぶゆき）

ハンブルク補習校、帰国子女受け入れ担当（横浜市）、日本語イマージョン・プログラム教諭（バージニア州）、ワシントン補習授業校を経て、現職。

帰国生、はじめのひと月

海外に長期間在留した後帰国する児童生徒の数は、毎年1万人を越えています。帰国生たちは、さまざまな期待と不安を胸に日本の学校に入ってきます。日本の学校で過ごす最初の一か月は、子どもたちにとって、人生の中の大きな節目の一つにちがいありません。

啓明学園に編入する帰国生は、それぞれ普通の学級に入りますが、必要に応じて、小学生は「国語」「算数」の時間に、中学生・高校生は、それに加えて「理科」「社会科」などの時間にも、「国際学級」と呼ばれる教室で個別指導（取り出し指導）を受けます。最初の一か月は、ほとんどの帰国生が「国際学級」に来ます。「国際学級」では、そこに常駐する専任の先生と、普通学級の授業も担当しながら交替で教える先生たちが協力して指導にあたります。とりわけ、専任の先生たちは、一人ひとりの帰国生の様子に絶えず注意を払います。最初につまずきがこれからの学校生活、日本での社会生活に大きな影を落としてしまうこともあるからです。

この子たちにどのように向き合っているのか、啓明学園で「国際学級」を担当する先生たちに話を聞きました。初等学校の原先生は、今年このポジションについたばかり、中学・高等学校の山下先生は、この道30年のベテランです。

◆小学生の場合

小学生の場合は、生活の中の言葉や行動の仕方を具体的に教えることから始まります。例えば、遊んでいる友だちの仲間に入りたいために使う、「入れて」という言葉は、低学年の子どもにとってはとても大切な言葉です。けがをしたときはどうするか、職員室にいる先生を呼ぶときはどうしたらいいかなども、学校生活に必要な生活の知識です。

校内の場所の名前、学校生活の約束事など、前からいる子どもたちにとってはあまりに当たり前のことになっているので、だれ

も説明してくれないこともあります。分からないことがあったら手を挙げれば良いと言われても、手の挙げ方は国によって微妙にちがいます。

編入してから2週間ぐらいの間は、45分の授業時間のうち20分ぐらいは生活に慣れさせるための「初期オリエンテーション」に使います。残りの時間で、今までどのように学習してきたか、日本の学習内容とちがうところはどこかなどをチェックして、学習の指導の方針を決めていきます。

国際学級にはたくさんの先生たちが関わっています。また、ホームルームでの様子や国際学級での様子がちがっていることもあります。それで、毎週担当者が集まって、一人ひとりの子どもたちの様子をふり返り、指導の方針を話し合います。初等学校では、これを「国際会議」と呼んでいます。

編入したときから保護者とは緊密に連絡をとるようにしていますが、一か月たったところであらためて面談をして、情報交換をし、心配なことがないか確認します。家での様子を聞いたり、宿題の出し方を再検討したりもします。



啓明学園 初等学校：国際学級